

佐保姫

森岡 正作

ひらく書の

鬣も背鰭もあらむ雪解川
北窓を開けば降り来詩の欠片
下萌や火山のやうな土竜塚
太陽の塔となるべく露の臺
佐保姫の虜となりて野に浸る
走り根を崖に晒して花椿
牛舎にも楽の流れて木の根開く

登四郎先生の有名な〈ひらく書の
第一課さくら濃かりけり〉という句
の「書」は、当然教科書のことであ
ろう。国語の授業の最初が桜に関す
る随筆だったりすれば、話は簡単で
あるがそうではあるまい。多分に感
覚的なものと思う。というのは小中
高校まで学校という所は、桜が校門
とか校庭、その周囲によく植えられ
ている。先生はきつと授業中ながら、
窓辺から見えてくる桜の景色に身も
心も奪われていたに違いない。

校門の桜と言えば、学校の新学期
ということでクラス集合写真撮影が
思い出される。だいたい四月七日前
後と思うが、桜はもう終わりの頃で
ある。ようやく四段ぐらいに生徒を
並べ終えて、いざ撮ろうとすると桜
吹雪になったり、風に髪が乱れると
言って騒ぐ女生徒がいたり、そうそ
う簡単には終わらない。桜は何かにつ
けて人騒がせな花である。